

(2)『青木村埋蔵文化財包蔵地地図』更新に関わる分布調査

～市町村技術指導の成果と課題～

寺内 隆夫

1 はじめに

遺跡（埋蔵文化財包蔵地）の把握と周知は、地域の歴史や文化への気づきを促し、それらを日々の暮らしや観光資源として活かす方法を探るための第一歩となる。また、遺跡を通して地域の誇りを醸成し、次世代に繋いでいく方法を模索する上でも鍵を握る。

ところが、地下に埋もれて目につきにくい遺跡は、把握と周知を怠ると知らぬ間に破壊されてしまう危険性を孕んでいる。さらに、地元住民や行政、開発事業者にとって、場所や範囲が不正確、あるいは市町村間で精度が大きく異なっていると、遺跡保護への対応・調整に戸惑う原因となってしまう。こうした点から、公的に『埋蔵文化財包蔵地地図（遺跡地図）』（以下、『包蔵地地図』）を作成・周知することが重要である。

県内では、専門職員による試掘を伴う詳細分布調査を実施している自治体と、未実施の自治体間で、『包蔵地地図』の基準や精度に差が生じていた。こうした点を是正するため、長野県教育委員会（以下、県教委）は、一定基準に則した『包蔵地地図』への改訂を各市町村にお願いしてきた。しかし、自治体によっては、専門職員の不在や、分布調査のノウハウがないことなどから、対応に苦慮してきたのが実情であろう。

他方、（一財）長野県文化振興事業団に属する長野県埋蔵文化財センター（以下、県埋文）は、大規模開発に伴う発掘調査の減少が予想される中、業務内容の見直しに取り組んでいた。

こうした現状を踏まえ、包蔵地の把握と周知を推進する県教委、『包蔵地地図』更新を検討していた青木村教育委員会、業務の見直しを模索する県埋文の3者が連携していくこととなった。

本稿は、青木村での『包蔵地地図』更新に伴う遺跡分布調査の事例報告である。県埋文としても初めての業務であり、今回の成果と課題に対し

て、各方面からご批判・ご教示をいただきたい。今後『包蔵地地図』更新を検討している市町村、あるいは県埋文の技術指導・業務委託のあり方を検討する上で、たたき台となれば幸いである。

2 調査に至る経緯

(1) 埋蔵文化財包蔵地の把握と周知の推進

全国で開発に伴う発掘調査が増加・定着した時代、文化庁は『埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について』（文化庁2008）の中で、自治体ごとに差があった包蔵地の把握と周知についても基準を示した。これに則し、県教委は『埋蔵文化財包蔵地の把握と周知に関する基準について』（県教委2014）で県基準を示し、各市町村教委に『包蔵地地図』の更新をお願いしてきた。

(2) 県埋蔵文化財センターの技術指導として

青木村教育委員会（以下、村教委）は、『包蔵地地図』更新に着手するため、2021（令和3）年、県教委へ協力を打診した。村教委には埋蔵文化財専門職員が不在で、地元有識者も多忙のため調査に専念できないなどの課題があったためである。同年2月の協議には、県教委の要請で、専門職員を抱える県埋文がオブザーバー参加することとなった。その後、3者協議に移行する中で、県埋文から技術指導の職員を2ヶ月間派遣し、分布調査に協力することとなった。

短期間で成果が求められるため、県教委在籍中に遺跡確認調査や包蔵地範囲の改訂に携わり、『県基準』策定作業にも関わった経験により、再任用の調査指導員である筆者が抜擢されたと受け止めている。



第1図 青木村の位置

(3) 調査期間と方法

3者協議で決まった『包蔵地地図』更新業務の内容と技術指導の概略は以下のとおりである。

- ・ 目 的 既存の『青木村埋蔵文化財包蔵地地図』と一覧表の更新。主に既存遺跡の範囲の明示と、中世城館跡などの追加
- ・ 期 間 2021（令和3）年4月1日（木）～5月30日（日）分布調査。続いて、地図・一覧表等を村教委が取りまとめ、周知・公開、県教委へ報告
- ・ 担当者 青木村教育委員会次長 宮下剛男、職員 清水正夫、技術指導 寺内隆夫
- ・ 方 法 現地調査（踏査）は、試掘を伴わない表面採取と地形等の確認。室内で既存資料の確認・検討ほか
- ・ 技術指導 分布調査（2ヶ月間）に参加し、踏査の手順や方法、包蔵地地図・一覧表作成方法などの技術指導を行う

3 青木村『包蔵地地図』更新に向けて

(1) 木村と村内埋蔵文化財の概要

小^{ちいさがたぐん}県郡青木村は長野県東部、上田市の西方12kmほどに位置する（第1図）。千曲川の支流である浦野川などの流域低地と扇状地、山地からなる。面積は約57km²で、その8割を山林が占めている。人口は4千人余を数える。

歴史に目を向けると、令制東山道の推定路（近世^{ほふくじ}の保福寺道）が村内を貫いており、その沿線が埋蔵文化財の宝庫と目される。中世では、在地勢力の城館跡、国宝三重塔を有する大法寺などが知られているが、いずれも埋蔵文化財包蔵地としては未登録である。青木三山と呼ばれる子^{こまゆみだけ}檀岳、^{おがみだけ}夫神岳、^{じゅうかんざん}十観山をはじめ信仰の山が多く、近世・近代の里と山を結ぶルート上に宗教関連施設が残存している（一部が村指定文化財）。また、この時代に6回の農民一揆が起り、「義民の里」「夕立と騒動は青木から」とも呼ばれている。そのため、住民の一部には遺跡と言えは義民の墓など（村指定文化財）、との感覚もある。今回の調査対象からは外れるが、近世以降の遺跡保護は重要課題になると思われる。

発掘調査事例には、上田染谷丘高校による中^{なか}挾^{ばさみ}遺跡のほか、「歴史の道」調査（長野県教委1987）に伴う保福寺道の試掘（五十嵐1990）、ほ場整備事業に伴う岡石遺跡^{おかいし}（調査団1976）や牧寄遺跡^{まきよせ}（村誌編纂委員会1994）がある。すべて昭和時代後半の事例で、小規模かつ件数も少なかったこと、その後本格的な発掘調査もなかったことから、必ずしも埋蔵文化財に対する住民の関心が高いとは言えない。

(2) 調査の目標

『包蔵地地図』は継続調査と更新が前提である。地下のすべてを見通すことはできないし、近世以降の埋蔵物で重要性が認められれば追加することになるからである。今回の調査条件では、完璧を目指すことは難しく、当面の行政措置に対応させるための中間報告という位置づけとなろう。開発行為に対し『文化財保護法』に則した行政措置を円滑に進めることが、村の開発担当部署や村教委の喫緊の課題だからである。目標の一つは、これに耐えうる地図を作成することである。

しかし、こうした業務だけに固執・忙殺されてしまうと、文化財保護の本来の目的、地域の誇りやロマンの源である遺跡を周知し、村の将来像に取り込む観点が薄れがちになってしまう。そうならないためにも『包蔵地地図』の作成にあたっては、上位に位置付けられる村の文化財保護に対する構想などを念頭におく必要がある。遺跡の場所を知ることによって地域の歴史・文化の舞台を実感し、



第2図 「せばっと」発掘地点西の保福寺道現状（東山道推定地）

学ぶ楽しさにつなげること、現在の暮らしを潤しどう活かすかを創造すること、次世代へ地域の誇りを伝えることが大切である。二つめの目標は、その基礎データとなりうる『包蔵地地図』の作成である。

今回、後者について十分に意見交換ができたわけではなかったが、調査に入るにあたり重要なポイントは、①古代東山道関連遺跡群、②中世の地域社会を復元できる遺跡群、にあるだろうとの話はさせていただいた。青木村は「日本一住みたい村」(宝島社2016)にも選ばれている。今後は、自然の豊かさや行政サービスの良さなどに加え、地域の歴史・文化への誇りやロマンを伝える取り組みにも力を入れていく必要がある。例えばイターン住人の次世代・次々世代が定着するには、地域を誇りに感じ、守りたい、見せたいと感じる資源が必要である。その一つは、遺跡を含めた地域の歴史や文化の中に求めることができよう。①・②は青木村の魅力発信する上で、重要な埋蔵文化財資源になると考えられよう。

4 分布調査の方法・手順

(1) 具体的な到達目標

一方、『包蔵地地図』をどこまで仕上げるか、具体的な到達目標も確認しておく必要がある。それは、

- ① 旧版で○印だけの遺跡に範囲を与える
- ② 旧版と『村誌』や現地踏査メモとの齟齬を解消し、位置や名称の確定
- ③ 『村誌』に載る中世城館跡の追加
- ④ 旧版に掲載されていない遺跡の追加
- ⑤ 近世以降の遺跡について村教委に提案
- ⑥ 開発終了箇所における遺跡残存の可能性についての指摘
- ⑦ 『包蔵地地図』更新版の完成、諸手続き、周知・公開に関する技術指導

⑧ 地元の文化財・歴史への関心の醸成などである。特に①～③は、3者協議によって最低限求められた到達点である。④～⑥は、将来の改訂版に向けて足掛かりをつけておく点で、技術指導の立場からの目標といえよう。また、⑦・⑧

は村教委への技術指導となる。

(2) 方法と手順

現実的な問題として、期間内に村内全域の悉皆調査は難しく、効率よく目標に到達するためには、調査地点や方法を絞り込む必要があった。

その方法と手順は、**村全体俯瞰**→**重要地点想定**→**現地踏査**→**検討**→**補足調査**とした。

具体的には、

- ① 村全体を俯瞰し、実感を得る(山頂から)
- ② 既存の地図・空中写真の読み取り(室内)
- ③ 旧版作成時や『村誌』の調査記録など、既存情報の精査(室内)
- ④ 現地確認と表面採取、聞き取り(現地)
- ⑤ 周知の遺跡外での踏査(現地)
- ⑥ ①～⑤作業の検討、下図・表作成(室内)
- ⑦ 必要箇所の補足調査(現地)

まず①②で、村全体を俯瞰し、各時代の遺跡立地の適地を抽出した。②では、ほ場整備などで改変された旧地形や特徴的な地割を復元し、低地の遺跡の有無を推測した。その上で、①～③を総合的に検討し、先にあげた重要ポイント①東山道と②中世の地域社会に関し、鍵となる地区を割り出した。東山道関係の岡石遺跡^{おかいし}、八ツ塚遺跡^{やつか}、牧寄遺跡^{まきよせ}周辺、中世では西洞地区^{にしぼら}全域、龍仙寺^{りゅうせんじ}周辺などである。

(3) 地形区分ごとの取捨選択手順

一方、重要ポイント以外の地区を踏査するにあたっては、地形区分ごと^①に取捨選択もおこなった。村内の地形は大きく、ア 山岳・高原、イ 扇



第3図 十観山から青木村の中心部を俯瞰

状地、ウ 浦野川流域などの低地に分けられる。

ア 山岳・高原 往復だけで半日は費やしてしまうこと、空中写真から畑地の山林（植林）・藪化が徐々に進んでいることが判明した。そのため、主に旧石器～縄文時代前半期の遺跡が想定される高原地帯の踏査は一部（入奈牧^{いりなぼくじょう}場内遺跡）にとどめた。また、高地の山城跡や山岳信仰遺跡の踏査は別の機会に譲った。

イ 扇状地 緩斜面の好立地に見えるが、小砂利混じりの土地が多く、主な開墾事業は中世以降と思われた。よって、推定東山道沿いの扇端部を除き、扇央部から扇頂部にかけては、縄文～古代とされていた箇所よりも、中世的な遺跡立地に主眼をおいて踏査することとした。

ウ 浦野川流域などの低地 ほ場整備が完了しており、古地図・空中写真を参考に、道陸神遺跡^{どうろくじん}周辺の微高地（宅地周辺）に踏査範囲を絞った。また、すでに住宅や公共施設が密集し、包蔵地登録のない村の中心部については、再開発に伴う不時発見が想定されそうな地点を対象とした。

5 重要ポイントに関わる想定と成果

ここでは、重要ポイント①古代の推定東山道と関連施設群、②中世地域社会を復元できる遺跡群について実施した調査のうち、代表事例となる2ヶ所に絞って報告を行う。

（1）古代の推定東山道と関連施設群

近世に活況を帯びた保福寺道沿いを、古代の令

制東山道に比定する研究者（黒坂1992ほか）は多い。その関連性を探る調査が岡石遺跡で行われ、一部が浦野駅跡公園として保護されている。

官道を想定すると、a. 道路敷、b. 駅家の施設群、c. 関連する寺社、祭祀場、d. 馬飼育に関わる牧や関連施設、e. これらを支える水田などの生産域、f. 官衙や生産の場で働く人びとの集落等々が、さほど遠くない地点に存在するはずである（近江2015、中村2017ほか）。ただし、水田可耕地がさほど広くなく、難所である保福寺峠越えを考えると、規定距離の駅家だけでなく、他の場所にも関連施設（例えば牧寄遺跡やハツ塚遺跡付近、上田市側の浦野地区）が点在、あるいは移設されたことも想定しておく必要を感じた。

まず、古代官道の発掘調査が進んでいる他都府県の事例（鳥取県埋文2018ほか）を参考に、米軍撮影の空中写真（国土地理院HP）と、明治時代初期の字界図・水田切図（村誌編纂委1993）で、直線路と考えられる令制東山道の場所を想定した。その上で、駅家の推定地である岡石遺跡（五十嵐1990）とハツ塚遺跡周辺（武部2004）と、牧寄遺跡周辺を検討した。

その結果、保福寺道が扇状地や山麓縁辺の直線路（第4・5図）に近く、令制東山道もほぼ同じ場所に埋もれている期待が高まった。また、岡石遺跡付近ではこの道に直交するN8°E前後の畦



第4図 令制東山道の痕跡を探す
とこがえり
床 帰 遺跡 (A) から岡石遺跡 (B) 間の直線的な崖 (↑) と
保福寺道（舗装道路）。右手は方格子割のあった水田



第5図 鳥取県青谷横木遺跡「山陰道跡の復元イラスト」
（鳥取県埋文2018）

畔（青木村誌1993）が、ほぼ百数m間隔で上田市浦野周辺まで確認できた（第6・7図）。これにより、道を地割の基準にした水田開発の可能性がでてきた。岡石遺跡には発掘された古代堅穴住居跡の主軸がこれに近い例があり、地割が古代までさかのぼる可能性もうかがえた。

次に、岡石遺跡の地割上の交点（現道交差点付近）を仮基点（第6・7図の★）にすると、東隣の軸線上に惣門地籍（寺関係か）や、大法寺付近の字堺線が乗る可能性がでてきた。前身の古代寺院が岡石遺跡の北北東（鬼門）を抑えていた可能性が想定される。岡石遺跡の北、阿鳥川沿いには「大庭」地籍（祭祀関連の名称か）があり勾玉採取の記録がある。公的な施設の北側、水辺の祭祀域が想定できよう。また、岡石遺跡の北側尾根上には飯縄神社、南側の浦野川を越えた地区には日吉神社（戦国期に現在地に移転）があり、地割上に乗る可能性も出てきた。

このように既存資料をあたってみると、上田市浦野を含めた地割上に、各種施設（遺跡）が存在する可能性が高まった。残念ながら、ほ場整備と阿鳥川の氾濫などで、現地の地割が大きく変わっ

ており、今回の踏査では古代までさかのぼる確証は得られなかった。そのため、推定東山道や水田地割交点部分の一部を岡石遺跡や道陸神遺跡に含めておくにとどめた。今後の試掘調査などによって確認することを期待したい。

（2）中世の推定道と土地利用形態

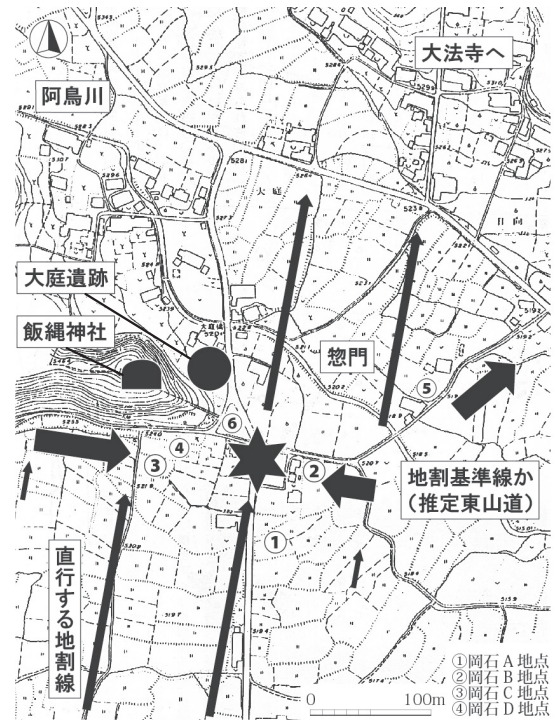
古代官道の直線路とは対照的に、保福寺道より一段高い扇央部（小谷の中央部）と山麓には、各谷の集落間を結ぶ曲線路が現在も残っている（第8図）。沿線上の各谷中央には東洞地区の薬師堂や中洞地区の村松神社があり、未発見の中世居館跡や集落の存在が浮上した。一方、信仰施設や城跡がある子檀岳山頂へ向かって、里から延びる道が各谷筋や尾根筋に存在していた。

旧版の『包蔵地地図』に未登録であった中世の遺跡に関しては、この谷と谷を結ぶ道沿い、山岳信仰に関わる道沿いを中心に踏査した。その代表例として西洞地区を紹介する（第8図）。

事前打ち合わせ時に、村松の館跡とその周辺を歩いた時の印象では、a. 谷を掌握する居館の場所としては奥すぎないか。b. 両側の尾根に城跡があるが、対応する集落や諸施設は谷のどこか。



第6図 岡石遺跡★周辺に残っていた方格地割
（国土地理院・空中写真に加筆）



第7図 岡石遺跡を基点★とした地割上の着目箇所
（岡石遺跡発掘調査団1976に加筆）



第8図 西洞地区に展開する中世遺跡群ほか

c. 縄文・弥生の記載がある遺跡とすると、小砂利混じりの扇央部で立地的にはよくない。d. 信仰の山である子檀岳の眺望がよく、現在も登山路の一つがあること、などが気になった。

まず、拠点となる遺跡の探索をおこなった。浦野川低地に近い扇端部には、塚穴古墳や古代の駅家候補地の一つでもあるハツ塚遺跡がある。中世の新興勢力としては、旧勢力の本拠地を避け、未開拓の扇央～扇頂部へ触手を伸ばすと想定した。その拠点は、各谷を結ぶ曲線路と子檀岳への道の交叉点、湧水点の近くでもある第8図★と想定した。踏査では、道がこのわずかな区間だけ直線になり、直交する凹地（堀跡か）や土塁も認められ、内耳土器片などが採取できたことから村松生地の館跡として新規登録した。

薄ヶ尾城跡の主郭直下の谷奥は竹ノ下地籍（館の下か）であり、城関連の施設が予想された。水田開発済みで遺物が拾えず包蔵地としては保留したが、生地—村松—竹ノ下と在地勢力の拠点が点在し、西洞の谷を抑えていた可能性が考えられる。今後、試掘調査などによって検証すべきであろう。

谷の開発に続き、両側の尾根筋には城・砦跡が造られていった。戦国時代末期には、徳川方の石川軍と真田軍が対峙したとの伝承が残る地域であり、石垣の状況から薄ヶ尾城跡と寺山砦跡もこの

時期に改修されたとと思われる。包蔵地の範囲は、信仰関連施設の点在中も加味して既存の縄張図（宮坂2013ほか）よりも広めにとった。

中世にさかのぼるとされる信仰関連遺跡では、大永寺跡が寺山砦跡直下に存在する。脇を通る道は信仰施設と山城のある子檀岳への登山道である。今回、旧版で縄文や弥生の包蔵地となっていた生地遺跡に村松の館跡を、西洞遺跡に大永寺跡を含めて登録することとした。

薄ヶ尾城跡への登城路途中には、村松岩屋堂があり、城を經由して尾根伝いに子檀岳へ通じる尾根道がある。また、東側尾根筋には、中洞地区の中心部にある村松神社里宮（村松神社遺跡とした）—中社—東城跡（今回未踏査）を經由して子檀岳へ向かう尾根道もある。今後、山間部に展開する信仰遺跡を抑えていく必要があるだろう。

6 重要ポイント以外の調査と成果

（1）古墳 村内で包蔵地登録されていたのは村指定の塚穴古墳のみである。他地区に石室の石を転用した話などもあったが、確認に手間取ると考えて踏査を見送った。よって、①塚穴古墳の周辺踏査。②近世信仰塚や尾根上の神社基壇部の目視。③古墳に関係しそうな遺物（勾玉など）が出土したとの伝承がある地点に絞った。

今回、近世の信仰塚付近から勾玉採取の伝承があり、塚穴古墳とはほぼ等間隔で尾根上に所在する三ツ山を包蔵地に登録した（第8図）。

（2）古代 県内の中山間地では、9世紀代に開発が始まる事例が多い。また、千曲川流域では仁和の大洪水（888年）があり、被災後東山道沿いに新規集落が造られた可能性も想定された。

湯川遺跡群では、そのほとんどの地点で須恵器や灰釉陶器を採取することができ、包蔵地の範囲拡大を大幅に拡大する結果となった。

（3）中・近世 『村誌』に信仰塚・墓と明記された塚の確認を行い、散布地に含める形で登録した。また、踏査の過程で廃寺の基壇や土塁の残存を確認した。西光寺跡を林口遺跡に、光明寺跡を月夜平遺跡に、各々既存の散布地範囲に含める形をとった。ただし、夫神地区の大松塚周辺の土

墓・基壇跡（今回保留）などのように、中世にさかのぼる確証のない廃寺・信仰施設は保留とせざるを得なかった。同様の遺構は各地区にありそうで、今後の課題である。

7 分布調査を終えて～今後の課題～

（1）青木村に関わる成果と課題

今回は短期間の踏査が主であったため、今後のさらなる『包蔵地地図』充実に向けて、技術指導の立場から課題をあげておきたい。

ア 採取遺物の現地性把握の問題 小礫を大量に含む扇状地では、摩耗した土器片が採取される例があった。当郷地区には押出地名があり、後世の土砂流出時に遺物が巻き込まれた可能性もある。遺物採取地点と遺跡範囲が一致しない場合も考えられ、今後、試掘調査などによって確認する必要がある（第9・10図）。

イ 予想される未発見遺跡への対応について 住宅や公共施設が集まる村の中心街は、各時代にお

いても好立地であったと考えられる。塚穴古墳の南側低地沿い、推定東山道周辺は注意を要する。今後、公共施設の改築などで掘削が行われた際に立ち合いを実施しておく、不時発見に対処できると思われる。

ウ 近世以降の文化財の保護について 青木三山はじめ、村内には信仰にかかわる山が多い。山頂、岩屋、山頂と里を結ぶルート上、集落内には、お堂や塚、石造物などが良好な形で残っており、一部は指定文化財になっている。今回、山城の痕跡が明瞭な地点や、社寺跡の伝承地を包蔵地に加えたが、今後は、個別指定や登録でなく、地域の信仰を復元するための総合的・広域的な調査と保護の検討が必要であろう。

エ その他 保福寺道では「歴史の道」の標柱近くの道形が、林道で削られるなどしていた。また、遺跡の確認や開発に伴う発掘調査、開発事業者との調整などに対処するため、体制の充実が必要と考えられる。

（2）県埋文技術指導としての成果と課題

今回の技術指導派遣で、感じた点をいくつかあげておきたい。

ア 県内すべてが対象地 当センターは長野県内全体が対象で、職員の地元でない場所が多くなる。決められた範囲内の発掘とは違い、分布調査の場合、ちょっとした地形の特徴や歴史的出来事、遺物採取や土地改変の伝承などが遺跡発見の決め手となる場合がある。これらの情報を得るため、市町村側担当者や地元住民との接触を円滑にすることが第一である。今回、地元の宮下次長、清水氏が同行していただけたおかげで、地権者さんらの情報を上手く聞くことができた。

また、派遣先に調査のノウハウを伝授するためには、委託業務よりは技術指導・技術協力の形が良いと考えられる。今回は短期間のため伝えられない点も多かったが、現地調査のほとんどに宮下次長が同行していただけたので、遺跡を探す時の目の付け所や、開発に伴う行政措置の方法などについて伝達する機会が得られた。



第9図 押出遺跡の現況



第10図 押出遺跡採取土器片

イ 地元の現状に寄り添う+αのプランの提案

市町村ごとに予算規模や期間、要求される着地点はさまざまである。理想的なレベルを主張することも時には必要だが、遺跡の保護には息の長い取り組みが必要となる。『包蔵地地図』も更新を重ねていくべきものである。「埋文は難しくて、やっかいだ」という印象を最初に植え付けてしまっただけでは継続に支障をきたすであろう。

一方、専門家でない人が想定できる内容に留まっていたのでは技術指導の意味がない。県埋文が関わったことで+αがあり、予想を超える成果が得られたと実感していただくことが重要であろう。

ウ 地元文化財への興味を醸成する 技術指導では、調査に同行してもらい具体的な技術や知識の伝達が基本である。しかしそれ以上に、教育委員会・役場職員や地元の方々に興味を持ってもらうことが大切である。興味を持ってもらえなければ、次への展開が望めないからである。

今回、地元向けに成果報告の話もあったが、コロナ禍の影響で断念せざるを得なかった。ただし、青木村歴史文化資料館で常設展示資料の展示替えに協力し、また、2021年夏に五島慶太未来創造館で行われた企画展『青木村にナウマンゾウ』で、長野県立歴史館による展示コーナー設置に関して橋渡しをすることができた。専門性を活かした普及活動、あるいは文化財に関わる問い合わせや協力先の紹介も、重要な技術指導の業務と考えられる。

8 おわりに

今回の技術指導は2ヶ月という短期であったため、分布調査や成果品の作成に関わる技術の伝達が不十分に終わってしまった感がある。派遣期間終了後、『包蔵地地図』と一覧表の更新が滞りなく終了したことに安堵を覚えている。

最後に、沓掛英明教育長をはじめ、ともに現地調査を行った宮下剛男教育次長・清水正夫氏、さらに五島慶太未来創造館・青木村図書館職員の方々、県教委文化財係担当者、前年度まで青木村役場に出向していた中沢道彦氏には多大な便宜を図っていただいた。記して感謝の意を表したい。

【参考文献・資料】

- 青木村教育委員会 2006『青木村に見る義民の伝統』
青木村誌編纂委員会 1993『青木村誌』自然編 村誌刊行会
青木村誌編纂委員会 1993『青木村字堺図』『青木村の水田
開発 明治初期の切図から』青木村誌刊行会
青木村誌編纂委員会 1994『青木村誌』歴史編 上 村誌刊
行会
青木村役場 2017『日本一住みたい村づくり計画』
五十嵐幹雄 1990「東山道の残したもの—小県郡青木村の
場合—」『信濃の歴史と文化の研究（二）黒坂周平先生
喜寿記念論文集』
上田市誌刊行会 2000『上田市誌 歴史編（3）東山道と
信濃国分寺』上田市
近江俊秀 2015『道が語る日本古代史』朝日新聞出版
岡石遺跡発掘調査団 1976『岡石遺跡発掘調査報告書』青
木村教育委員会
木下良監修・武部健一 2004『完全踏査古代の道 畿内・
東海道・東山道・北陸道』吉川弘文館
黒坂周平 1992『東山道の実証的研究』吉川弘文館
坂井美嗣 1981「青木村辻田遺跡出土の石器」『上小考古』
8
坂本嘉和 2019「[遺構事例] 鳥取県青谷横木遺跡—駅路・
条里・官衙—」『日本古代の輸送と道路』八木書店
鈴木正崇 2015『山岳信仰』中公新書 2310
宝島社 2016『田舎暮らしの本』2月号 宝島社出版
鳥取県埋蔵文化財センター 2018『青谷横木遺跡Ⅰ』
中井均・斎藤慎一 2016『歴史家の城歩き』高志書院
長野県 1936『長野県町村誌』東信篇
長野県教育委員会 1987『歴史の道調査報告XⅥ～XⅩⅡ（復
刊）』長野県文化財保護協会
長野県教育委員会 2014『埋蔵文化財包蔵地の把握と周知
に関する基準について』
中村太一 2017「古代の道路と景観」『日本古代の道路と景
観—駅家・官衙・寺—』八木書店
文化庁 2008『埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等に
ついて』
宮坂武男 2013『縄張図・断面図・鳥観図で見る 信濃の
山城と館』第3巻上田・小県編
宮原平八郎 1999『若林清先生のご案内で青木村をめぐる』
青木村教育委員会 2021『埋蔵文化財包蔵地地図』『埋蔵文
化財包蔵地一覧表』
青木村役場 HP『青木村土砂災害ハザードマップ』ほか
国土地理院 HP 地図閲覧サービス
長野県庁 HP 砂防課『「過去の災害に学ぶページ」